

## ● 海外都市行政視察に参加して（スポーツ振興について）

団員 土井田 学

松山市の姉妹都市であるドイツのフライブルク市に三度目の訪問の機会をいただいた。今回は5時間程の短時間の滞在で、主目的はS Cフライブルクに関する視察である。

1月13日、10時前にフライブルク市に到着、案内の前田成子さんから笑顔の出迎えをいただき、前田さんには初回の訪問からお世話になっており、バスを降りるや名前を呼んでいただき懐かしさが湧いてきた、どちらからともなく旧知の先輩議員の回顧談を・・・。

早速、石畳の旧市街地を歩く。街中を縫うように静かに走るトラム、縦横に流れる水路、そびえ立つミュンスター大聖堂等々、思い出深き風景にしばし感動。



(ミュンスター大聖堂)

フライブルク市役所へ向かい、ディーター・サロモン市長を表敬訪問。市長、ギュンター・ブルガー国際交流部長、独日協会フライブルク松山会のユルゲン・ヴェルケ会長等の出迎えを受け市長から歓迎のご挨拶をいただき、その中で、今回宿泊予定が無いのを残念がっておられた。

難民問題に触れ、子供たちの教育環境を尋ねると、フ市到着後、数日以内に学校を決めると聞き対応の素早さに感心した。

昼食後、目的のS Cフライブルクのサッカースタジアムへ。コミュニケーション・メディア担当のアンディロウ・クラフト氏と育成施設長のアンドレアス・シュタイアート氏の出迎えを受け、丁寧なご説明とご案内をいただく。

お二人から感じたことは、まずSCフライブルクに対して、誇りと愛着を強く持っていること。

若い人を育てるのはチームを強くするためだけではない、青少年の健全育成に主眼を置いていること。青少年教育・人格教育を長期的、持続的、計画的に行うことなど。



(プレスルームにてレクチャー)

常に遠くを見て、人格あるクラブにすると、熱く語るお二人の、熱意溢れる態度に好感を抱いた。

人格育成第一とするその教育方針はサッカー界だけでなく全ての青少年教育に通じるものであろう。まさに日本でいう文武両道である。

そのSCフライブルクのサッカースクールであるが、2001年から始め、11歳から23歳位の若者が所属、授業料は0、学生の連帯意識は強い。チームのレギュラー11人中5名はスクール出身者が占めている。生徒のうち、95%はブンデスリーガーにはなれない、僅か5%しかなれないが、サッカーだけでなく青少年教育にも力を入れているので、人間としてもしっかり育っていると自信たっぷりであった。

グラウンドに入ると芝生の緑が綺麗であった。12cm下に暖房装置を設置し、1度で作動し20度で停止するという。なるほど寒い冬でも芝生が元気で青々としていた。



(青々とした芝生のグラウンド)

環境に優しいスタジアムを目指し、

23年前から屋根にはソーラーパネルを設置し、15,000リットルのタンクには常に温水を用意しているという。

昨年、新スタジアム建設が議会で承認され、住民投票で可決、収容人数も現在の25,000人から30,000人に増やす、建設費6,000万ユーロから7,000万ユーロ(日本円にして78億から104億円)はクラブが負担し、

市は開発費と基礎工事費を負担、2019年完成予定である。人口22万の街でいかに市民がチームを応援し、支えているかが伺い知れる。

ちなみに試合チケットは殆んど完売、市民とチームの強い絆を感じた。

クラブは黒字経営で1部の時は市からの助成はなく、市へ納入する方である、2部になると市から多少の助成が入ると聞く。

現在、ドイツのブンデスリーガは、観客動員数では世界第1位のプロサッカーリーグである。その中で小さな地方クラブとして発足したSCフライブルクが選手獲得の困難や恵まれない予算等を克服して、今や規模は小さいがドイツで最もモダンなクラブの一つとして評価され、国内外のクラブから「模範的クラブ」として視察が相次ぐのはクラブの運営方法、選手への指導力、若者の育成方法、そしてスポンサーを大切にしている心であると思った。

スポンサーの専用の特別室の充実は勿論のこと、スタンドのスポンサー専用のシートにもカバーをかけているその心遣いに感心した。

サッカースクールの若者達が卒業の時、有望選手が他のクラブへ行くと言ったらどうするかと意地悪な質問をすると、即座に右手の指を2本立て、「ノー・ノー」と横に振りニッコリ微笑み、そういう人間は居ないと……。さもありませんの思いである。生徒同士の横の連帯、指導者と生徒の信頼関係、そしてクラブに対する強い愛着、「絆」を感じた。

SCフライブルクと愛媛FCは2008年にフレンドシップ協定を結んでいる。両クラブ共、予算面や地方都市が本拠地等、類似点がある。もっと交流を深め、若手の育成、試合戦法、クラブの運営方法等、学ぶべき点は大いに学び、来季は共に1部に昇格をしてほしい。

両チームの大活躍を望みフライブルク市を後にした。



(スタジアムにてガッツポーズ)